

幼児の言語発達におけるサピア・ウオーフ仮説に関する研究―「文化と心理学」から学ぶ―

佐藤公代

(愛媛大学教育学部)

(問題と目的)

「いかにして文化は言語に影響をおよぼすのか」「いかにして言語は文化に影響を与えるのか」という課題は、言語の比較文化研究において、重要な問題であることは周知の通りである。そこで議論される「サピア・ウオーフ仮説(言語相関性)」には、さまざまな解釈がとりあげられる。それを整理し、幼児の言語発達に応用できないだろうか、というのが今回の研究目的である。ちなみに、「サピア・ウオーフ仮説」とは、「異なる言語を話す者は、その言語の相違ゆえに、異なったように思考する。」ということである。

(方法)

「文化と心理学」(D, マツモト著、南雅彦、佐藤公代監訳、北大路書房)の「言語と世界観:言語相関性の例」(174-181頁)をまとめ、幼児の言語発達とのかかわりについて筆者の見解を述べる。

(まとめ)

1. 「サピア・ウオーフ仮説」を支持する初期の研究

キャロルとカサグランデの研究: ナバホ語と英語の話者比較=ナバホ語では、「球状物」「球状の薄い物」「長く柔軟な物」などのように球状の状態によって、動詞の使い方にも違いがあらわれる。つまり、物質を形状によって分類している。その意味では、英語よりもはるかに複雑である。

グリーンソンの研究: 「色を分割する特定の方式は、英語の構造の一部である。」

ブラウンとレネバークの研究: 「色彩の記号化と記憶作業で、色彩が記憶される正確さの関係」

2. 「サピア・ウオーフ仮説」に異議を唱える初期研究

バーリンとケイの研究: 英語やドイツ語のような言

語では、78種の言語の調査から、普遍的階層から11の基本色の用語すべてを用いるが、ニューギニアで話されるダニ語のような言語では、2つしか用いられない。さらに、グリーンンの主張を確かめるために、20種の言語における色彩に関する用語の区分調査において、いかなる言語にも限られた数の基本色を表す用語がある。つまり、異なる文化に属する人々も全く同じように色を知覚している。

3. 「サピア・ウオーフ仮説」を支持する最近の研究

ニエカワーワードの研究: 日本語話者はたとえ結果が肯定的であってもなくても英語話者以上に責任転嫁をする。

ブルームの研究: 「中国語話者は反事実条件文を用いた仮定的な話に対し、英語話者ほどには仮定的解釈をしない。」つまり、「英語では、仮定法の時制が用いられるのに対し、中国語では、それぞれの動詞を必ず特徴づけなければならないという意味での仮定法は存在しない。」

ケイとケンプトンの研究: メキシコのユカタン半島の土着言語であるタラフマラ語は、青と緑を区別しない言語である。言語上の差異が非言語上の作業に影響をおよぼす。

ルーシーの研究: アメリカ英語とメキシコ南東ユカテク・マヤの言語を比較し、この2つの言語の差異に関連する特有の思考様式の割り出し。

フセインの研究: 中国語特有の様相が情報処理の容易さにかかに影響をおよぼすか。

ガルロ: アメリカ英語とメキシコで話されるスペイン語の比較から、言語が色に対する記憶の保持に影響がある。

サンタとベーカーの研究: ある形状の視覚再現における、その質と順序における言語の影響調査。

リンとシュワネンフルーゲルの研究: 英語と台湾系中国語の比較より、言語構造はアメリカ人と中国語話者の分類知識の構造に関連。

4. 「サピア・ウオーフ仮説」へさらなる異議を唱え

る研究

アウの研究：ブルームのデータ解釈が妥当ではない。つまり、「仮定的解釈の使用はおそらく仮定法の使用、もしくは中国語での事実に対する論法に関連するものではない。」

タカノの研究：ブルームの研究の概念的および方法的な問題点の指摘。「言語的差異ではなく、数量的処理における差異」の指摘。

5. 「サピア・ウオーフ仮説」：結論

「言語構造の違いが言語使用者の思考様式に影響を与える」という「サピア・ウオーフ仮説」の解釈法の分析（フィッシュマンによる）をまとめると、4つのレベルになる。レベル1は語彙的語義的、言語活動に関するもので、いちばん簡単、レベル2は語彙的語義的、非言語活動に関するもの、レベル3は、文法的、言語活動に関するもの、レベル4は、文法的、非言語活動に関するもので、もっとも複雑である。どのレベルで検査しているのかを見極めることが大切である。

語彙は思考のプロセスにさほど関係なく、統語論と文法からなる言語間の違いにおいては、言語が認知に影響をおよぼしている。例えば、日本語の呼称の言語構造と同様に、インドネシアの言語は、聞き手の社会的地位、年齢、性別により呼称が細分化されている。したがって、ハントとアグノリの研究によると、ジャワ語を話すときには、英語を話すときよりも、社会や地位による違いに対しての意識がより厳密になる。つまり、「ウオーフ説」を裏づける「社会的地位への意識に対してより明確になる」ことが示唆される。

6. バイリンガリズムに関する「サピア・ウオーフ仮説」の見解

モノリンガリズム（単一言語論）だけではなく、バイリンガル（2言語併用）、マルチリンガル（多言語併用）に対しての「サピア・ウオーフ仮説」をまとめると、次のようになる。支持説では、言語は概念を変えうる。変形支持説では、言語は概念と関係しうるが、必ずしも言語が概念を変えるわけではない。なぜなら、概念相違の原因は、文化や文化価値観にあるからである。

7. バイリンガルにおける「サピア・ウオーフ仮説」の再考

アービンの比較文化研究において、絵画統覚検査から抜粋した絵にたいしての英語とフランス語のバイリンガル反応をみると、英語よりもフランス語において、より攻撃性、自立性、退避傾向を示した。これは、フランス文化へのより高い評価によって、多弁、性格差を示したのである。

「文化親和仮説」（単にバイリンガルの移民が、使用している言語に基づいた文化的信条、文化的価値観に自ら加入する傾向。使用言語が変われば、言語に付随している文化価値も変わる。）と「少数派グループ加入仮説」（自分を少数民族の一員としてみなし、自民族の言語を使用する時、ステレオタイプの少数派文化の典型的な行動を取る傾向。）は、ステレオタイプの想定を正しいと仮定した場合に同じ予測となる。言語環境の違いで行動の違いや性格の違いが予測可能となり、使用言語によって、他者に対する知覚認識が異なることも示唆されれば、言語相対論とも合わさって説明が可能となる。

（結論）

幼児の言語発達にとって、「サピア・ウオーフ仮説」はどんな意味をもつのであろうか。マツモトの見解を参考にしながら筆者なりに考えてみた。

- 1) 「サピア・ウオーフ仮説」を考える場合、どのレベルでの問題なのかを明確にして、幼児に言語教育、知的教育をすべきであろう。つまり、語彙は思考のプロセスにあまり関係がなく、統語論と文法は、言語が認知に影響をおよぼしている。
- 2) 日本語以外にいろいろな語学を勉強する場合、日本語をきちんと学んでから、いろいろな語学をやっても遅くはないと考える。
- 3) 相関関係と因果関係を同一に考えるべきではない。相関があるからといって、それが因果関係に結びつくとは限らないのである。
- 4) 脳の働き方の違いであり、個人差であるから、強制してのびる子どももいれば、逆にゆがんでしまう子どももいるので、その見極め方が重要であろう。
- 5) できないものにも挑戦する経験は、あとで転移できるので、幼児の様子を見ながら経験させてもよいであろう。

（注）昨年に続き、マツモト先生、南雅彦先生にはお世話になりまして有り難うございます。感謝します。